

長崎県本土西南部方言の動詞テ形における形態音韻 現象

有元, 光彦
山口大学

<https://doi.org/10.15017/24483>

出版情報：九州大学言語学論集. 32, pp.167-186, 2011. Department of Linguistics, Faculty of Humanities, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



長崎県本土西南部方言の動詞テ形における形態音韻現象

有元 光彦

(山口大学)

arimoto@yamaguchi-u.ac.jp

キーワード： 長崎県本土西南部方言 動詞テ形 テ形音韻現象

0. はじめに¹

本稿の目的は、長崎県本土西南部方言の動詞テ形を対象とし、そのデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは、有元光彦(2007a, 2007b, 2007c)等と言うところの「テ形音韻現象」である。² 有元光彦(2007c)によると、テ形音韻現象は次のように定義されている。

(1) テ形音韻現象：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類(語幹末分節音の違い)によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言 Δ において、＜書いてきた＞を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、方言 Δ

¹ 本稿の一部は、平成 16～18 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(研究代表者：有元光彦・No.16520281)、及び平成 19～21 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(研究代表者：有元光彦・No.19652041)によるものである。フィールドワークにおいては、長崎県長崎市茂木・三和・野母崎、及び西彼杵郡長与町の各教育委員会・教育センター・公民館及びインフォーマントの方々に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

² 「テ形音韻現象」という名称は暫定的なものである。以前の拙論では「テ形現象」と呼んでいたが、有元光彦(2010b)以後この名称に改めている。内容は変わっていない。

はテ形現象を持つと言う。³

本稿では、長崎県本土西南部方言にも周辺地域と同様にテ形音韻現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのタイプを示すか、さらにこのタイプが周辺地域のテ形音韻現象のタイプとどのような関連性があるか、について分析する。

1. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形(underlying form)に音韻ルール(phonological rule)が線的(linear)に適用されることによって、音声形(phonetic form)が派生される。⁴ 基底形は、心内辞書(mental lexicon)に登録されている辞書項目(lexical item)が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成(基底形)は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞:

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>,
/kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>,
/sin/<死ぬ>など

b. 母音語幹動詞:

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など

c. 不規則語幹動詞:

/i/~/it/~/itate/<行く>⁵, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。また、テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば、[kita]<(～て)きた>, [mire]～[miro]<(～て)

³ 共通語においても、動詞の種類によって、当該部分に「テ」が現れるか「デ」が現れるかの違いがあるので、共通語もテ形音韻現象を持っていることになる。従って、テ形音韻現象はすべての方言に存在することになるが、そうであるからと言って、テ形音韻現象の存在意義がなくなるわけではない。

⁴ 以下、基底形は記号/ /で、音声形は記号[]でそれぞれ括る。

⁵ /itate/は、語幹末分節音が/e/で終わるので、下一段動詞(母音語幹動詞)であるが、便宜上ここに並べておく。

みろ>, [kure]<(～て)くれ>等である。

2. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成 21(2009)年 2 月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、長崎県長崎市^{もぎ}茂木・^{さんわ}三和・^{のもぎ}野母崎、^{にしそのぎ}西彼杵郡^{ながよ}長与町である。

坂口至(1998:2)によると、長崎県方言は「中南部本土方言」「北部本土方言」「南部離島方言」「北部離島方言」に大きく分類される。本稿で扱う諸方言はすべて「中南部本土方言」に属しているが、さらに細かくは、長崎市茂木方言が「長崎方言」に、三和・野母崎・長与町方言が「^{そのぎ}大村・彼杵方言」に分類されている。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。記号&はインフォーマントが聞いたことがある(使用しない)と回答していることを表す。また、記号----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音(stem-final segment)が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が /k/ である動詞、/kak/ <書く> は「k 語幹動詞」と呼ぶ。「 i_1 , e_1 語幹動詞」は、語幹が 1 音節である i, e 語幹動詞を、「 i_2 , e_2 語幹動詞」は、語幹が 2 音節以上の i, e 語幹動詞をそれぞれ表す(インデックス番号が付いていない場合は両方を含む)。

3. 分析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形音韻現象のタイプを考察していく。⁶

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。表の左端列に挙げていない語幹が使われる場合には、その都度注で説明する。

3.1. 長崎市茂木方言

本節では、茂木方言のテ形音韻現象について記述する。【表 1】に動詞テ形のデータを挙げる。表の最初の行にある A, B は別の話者を表している。話者 A は女性、

⁶ 各方言のデータ、及びそれに関する簡単な考察については、すでに有元光彦(2010b:30-37)に記してある。

話者 B は男性である。

【表 1】 茂木方言の動詞テ形

語幹	A	B	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:ʃikita kokkita	ko:tekita &kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tondekita *tokkita	tondekita to:deitta &to'kkita	飛んできた
asob<遊ぶ>	asonkita	asondekita &asu:dekita asonkita	遊んできた
jom<読む>	jondekita jonkita	jondekita *jokkita *jonkita	読んできた
kas<貸す>	kaʃitekita kakkita	kaʃitekita *kakkita	貸してきた
kak<書く>	kaitekita kakkita	kaitekita *kakkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita konkita	koidekita *konkita	漕いできた
oeg<泳ぐ>	ojokkita *oekkita	ojonkita	泳いできた
tor<取る>	tottekita tokkita	tottekita tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kattekita *kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindekure *ʃɪnkure	ʃindekure ʃɪnkure	死んでくれ
mi<見る>	mitekita *mittekita *mikkita	mitekita mikkita	見てきた

oki<起きる>	okitekita *okittekita okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita *dekkita	detekita dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it<行く>	ittekita itekita *ikkita *itakkita	ittekita itekita *ikkita	行ってきた
ki<来る>	kitekurenne: *ki?miŋka	kiteminne	来てみないか
s<する>	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	ʃitekita	してきた

【表 1】を見る限りでは、かなり個人差があるが、おおむね全体性テ形現象方言であると考えられる。ここでは、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に、促音または撥音が現れている。撥音が現れる場合は、語幹末分節音が**/b, m, g, n/**の場合である。その他の場合には、促音が現れる。しかし、不規則語幹動詞の場合は[te]が現れているため、完全な全体性テ形現象方言とは言えないかもしれない。この点で、全体性テ形現象に崩壊(非テ形現象化)が起こっているのではなかろうか。実際、個人差まで考えると、話者 A より話者 B の方が、全体性テ形現象の崩壊が激しい。

また、b 語幹動詞では話者 A, B 両者に、g 語幹動詞では話者 B に、「音節数条件」が関与している。「音節数条件」とは、有元光彦(2007a:212)によると、次のように設定されている。

(3) 音節数条件: 1 音節語幹の場合は排除される。

これは、テ形音韻現象を司るコア・ルールである「e 消去ルール」に課せられるフィルターである。e 消去ルールとは、次のようなフォーマットによって記述されるものである。⁷

⁷ (4)における「X^c」は、集合 X の補集合(complement)を表す。

(4) e 消去ルール: $e \rightarrow \phi / X^c] t __]$

音節数条件の本質は、テ形音韻現象の崩壊であると考えられるので、b, g 語幹動詞両方に音節数条件が関与している話者 B の方がより崩壊が進行しているということになる。⁸

ただし、茂木方言において(4)を仮定する必要があるかどうかは吟味する必要がある。不規則語幹動詞を除いて考えると、テ形接辞の基底形を /h/ と仮定すれば、(4)は不要になるのである。実際、全体性テ形現象方言であるタイプ W1 方言では、テ形接辞の基底形として /h/ を仮定している (cf. 有元光彦(2007a:124-135))。

全体性テ形現象方言は、現時点までにタイプ W1 方言という 1 種類しか見つかっていないが、そこでは語幹末分節音が /m, n/ の場合に撥音が現れるので、茂木方言とは異なるタイプであることになる。今回の調査により、新たなタイプが発見されたことになるので、茂木方言のようなタイプを「タイプ W2 方言」と呼ぶことにする。ちなみに、タイプ W1 方言は鹿児島県南さつま市笠沙町片浦・枕崎市西白沢の方言である (cf. 有元光彦(2007a:124-135))。

さらに、音節数条件が関与していること、不規則語幹動詞は例外的であることから考慮すると、有元光彦(2007b)の生物学的な記述モデルにおいて、タイプ W2 方言はタイプ W1 方言の“亜種”であると考えられるかもしれない。有元光彦(2007b:59)には「1 つの擬態種(擬似テ形現象方言)に亜種が存在するということは、もう 1 つの擬態種(全体性テ形現象方言)にも亜種が存在する可能性が予測されるが、現時点では発見されていない。」とあるが、この亜種がまさに発見されたことになるのではなかろうか。

次に、一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

【表 2】

	A		B	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	*min miran	mita *mitta
起きる	okin %okiran	okita *okitta	*okin okiran	okita *okitta

⁸ 音節数条件の本質がテ形音韻現象の崩壊(非テ形現象化)である旨のことは、有元光彦(2007a:220)に「非テ形現象化の指向性 δ」として定式化されている。

出る	%den deran	deta *detta	*den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 2】を見ると, e₂ 語幹動詞以外は r 語幹化が進行しているようである。一段動詞において r 語幹化が起こっていると, (4)が適用されにくくなり, 促音や撥音が現れにくくなるが, 茂木方言では, r 語幹化がテ形音韻現象にあまり影響を与えていない(関与していない)ようである。⁹

3.2. 長崎市三和方言

本節では, 三和方言(ためいし かやき 為石・蚊焼)のテ形音韻現象について記述する。【表 3】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表 3】 三和方言の動詞テ形

語幹	為石	蚊焼	意味
kaw<買う>	ko:tekita *kokkita	ko:tekita *kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tondekita *toŋkita	to:dekita *toŋkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita	jo:dekita	読んできた
kas<貸す>	kaʃitekita *kakkita	kaʃitekita *kakkita	貸してきた
kak<書く>	kaitekita *kakkita	kaitekita *kakkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita	koidekita *koŋkita	漕いできた
oeg<泳ぐ>	ojoidekita	oe:dekita	泳いできた

⁹ このことは, 例えば r 語幹化が 1 つのルールであったとして, 語彙音韻論(Lexical Phonology)の枠組みで考えると, テ形接辞が属する語形成層(stratum)と, 否定形・過去形が属する語形成層が異なるということになる(cf. Mohanan(1986))。そして, r 語幹化ルールは後者を適用領域(domain)とするルールであると仮定される。

	*ojo:dekita *oe:dekita		
tor<取る>	tottekita	tottekita *tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita	kattekita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindekure	ʃindekure	死んでくれ
mi<見る>	mittekita *mittekita *mikkita	mittekita *mittekita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okittekita *okikkita	okitekita *okittekita *okikkita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita *dekkita	detekita *dettekita *dekkita	出てきた
uke<受ける>	uketekita *ukettekita *ukekkita	uketekita *ukettekita *ukekkita	受けてきた
i~it<行く>	ittekita itekita *itatekita *itattekita	itekita *ikkita	行ってきた
ki<来る>	kitemiro *ki?miro	kitemiro *ki?miro	来てみないか
s<する>	ʃitekita *ʃikkita *setekita	ʃitekita *ʃikkita *setekita	してきた

【表 3】を見ると、三和方言は非テ形現象方言であることが分かる。即ち、すべての動詞にわたって、「テ」「デ」に相当する部分に[te]または[de]が現れている。

次に、一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

【表 4】

	為石		蚊焼	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*mi _N miran	mita *mitta	%mi _N miran	mita *mitta
起きる	*oki _N okiran	okita *okitta	oki _N *okiran	okita *okitta
出る	*de _N deran	deta *detta	de _N *deran	deta *detta
受ける	uke _N *ukeran	uketa *uketta	uke _N *ukeran	uketa *uketta

【表 4】を見ると、為石では e₂ 語幹動詞以外は r 語幹化が進行しているが、一方蚊焼ではすべての一段動詞で r 語幹化は進行していないようである。

3.3. 長崎市野母崎方言

本節では、野母崎方言(脇岬^{わかみさき}・野母^{の も})のテ形音韻現象について記述する。【表 5】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表 5】 野母崎方言の動詞テ形

語幹	脇岬	野母	意味
kaw<買う>	ko:tekita *kokkita	ko:ʃikita *kokkita ¹⁰	買ってきた
tob<飛ぶ>	to:dekita *toŋkita	to:ɖjikita	飛んできた
jom<読む>	jo:dekita	jo:ɖjikita ju:ɖjikita	読んできた
kas<貸す>	kja:tekita *k(j)akkita	kja:ʃikita	貸してきた
kak<書く>	kja:tekita	kja:ʃikita	書いてきた

¹⁰ インフォーマントによると、高浜地域で言うとのこと。

	*kjakkita		
kog<漕ぐ>	koidekita *ko:dekita	koidekita *ko:dzikita	漕いできた
oeg<泳ぐ>	oe:dekita *oenkita	ojo:dzikita *oe:dzikita ¹¹ oju:dzikita	泳いできた
tor<取る>	tottekita *tokkita	totfɨkita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita	kattfɨkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ɕindekuiro	ɕindzɕimaeba	死んでくれ
mi<見る>	mitekita *mittekita *mikkita	mitfɨkita *mittfɨkita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okittekita *okikkita	okitfɨkita *okitfɨkita	起きてきた
de<出る>	(ud)detekita *dettekita *dekkita	detfɨkita *dettfɨkita *dekkita	出てきた
uke<受ける>	uketekita *ukettekita *ukekkita	ukefɨkita *uketfɨkita *ukekkita	受けてきた
it～itate<行く>	itatekita *itakkita	itfɨkita *itfɨkita	行ってきた
ki<来る>	kitemijai *kiʔminke	kitɕiminne	来てみないか
s<する>	ɕitekita *ɕikkita *setekita	ɕitfɨkita	してきた

【表5】を見ると、脇岬方言も野母方言もいずれも非テ形現象方言であることが分かる。ただ、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声は異なっている。脇岬では

¹¹ インフォーマントによると、聞いたことがあるとのこと。

[te], [de]が, 野母では[ɸi], [dʒi]がそれぞれ現れている。従って, 脇岬方言はタイプ N1 方言, 野母方言はタイプ N2 方言ということになる。

次に, 一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

【表 6】

	脇岬		野母	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	%miN miraN	mita *mitta	miN miraN	mita *mitta
起きる	%okiN okiraN	okita *okitta	okiN okiraN	okita *okitta
出る	%deN deraN	deta *detta	deN deraN	deta *detta
受ける	ukeN *ukerAN	uketa *uketta	ukeN *ukerAN	uketa *uketta

【表 6】を見ると, いずれの地域でも r 語幹化は進行していないようである。

3.4. 西彼杵郡長与町方言

本節では, 長与町方言^{ほんがわちごう おかごう}(本川内郷・岡郷)のテ形音韻現象について記述する。本川内郷は山側に, 岡郷は海側に位置する地域である。【表 7】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表 7】 長与町方言の動詞テ形

語幹	本川内郷	岡郷	意味
kaw<買う>	ko:tekita ko:ɸikita *kokkita	ko:tekita *ko:ɸikita *kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	to:ɸikijoru	tondekita to:dekita *to:dʒikita	飛んできた
jom<読む>	jo:dekita	jondekita	読んできた

	jo:ɖʒikita	jo:dekita *jo:ɖʒikita	
kas<貸す>	kja:tekita kja:ʈʃikita	kaʃitekita *kja:tekita	貸してきた
kak<書く>	kja:ʈʃikita	kaitekita *kja:tekita *kakkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	ke:dekita ke:ɖʒikita	koidekita *ke:dekita	漕いできた
oeg<泳ぐ>	oe:ɖʒikita	----	泳いできた
tor<取る>	tottekita *totʈʃikita	tottekita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita *katʈʃikita	kattekita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindekure *ʃiŋkure	ʃindekure	死んでくれ
mi<見る>	mitekita *mittekita *mikkita *miʈʃikita	mitekita *mittekita *mikkita *miʈʃikita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okittekita *okikkita *okiʈʃikita	okitekita *okittekita *okikkita *okiʈʃikita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita *dekkita *deʈʃikita	detekita *dettekita *dekkita *deʈʃikita	出てきた
uke<受ける>	*ukettekita *ukekkita ukeʈʃikita	uketekita *ukettekita *ukekkita *ukeʈʃikita	受けてきた
it～itate<行く>	itaʈʃikita	ittekita *itekita	行ってきた

		*itatekita	
ki<来る>	kitemiro *kiʔmiro *kiʔʔmiro	kitemiraŋka	来てみないか
s<する>	ʃitekita *ʃiʔʃikita *setekita	ʃitekita *setekita	してきた

【表 7】を見ると、まず本川内郷方言は擬似テ形現象方言(タイプ PA 方言)であることが分かる。共通語の「テ」「デ」に相当する部分を観察すると, w, b, s, k, e₂ 語幹動詞では[tʃi]が, m, g 語幹動詞では[dʒi]がそれぞれ現れている。¹²

また、岡郷方言は非テ形現象方言(タイプ N1 方言)であることが分かる。

次に、一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

【表 8】

	本川内郷		岡郷	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	mi _N mira _N	mita *mitta	mi _N mira _N	mita *mitta
起きる	oki _N okira _N	okita *okitta	oki _N okira _N	okita *okitta
出る	de _N dera _N	deta *detta	de _N dera _N	deta *detta
受ける	uke _N *ukera _N	uketa *uketta	uke _N *ukera _N	uketa *uketta

【表 8】を見ると、すべての一段動詞で r 語幹化していないようである。

4. 各方言の比較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形音韻現象を比較する。まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表 9】にまとめる。ここでは、記号 Q は促音を、記号 N は撥音をそれぞれ表す。記号 / は、その両端にある音声がいずれも現れる、

¹² ここには、有声性順行同化ルール(cf. 有元光彦(2007a:46))が適用されると考えられるが、そうすると b 語幹動詞の場合だけが例外となる。

即ちインフォーマントによって揺れがあることを表す。記号\$は、「音節数条件」が関わることを表す。記号---は、/i/~/it/<行く>という語幹が存在しないことを表す。

【表 9】 共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較

語幹末 分節音	茂木方言		三和方言		野母崎方言		長与町方言	
	A	B	為石	蚊焼	脇岬	野母	本川内郷	岡郷
w	Q	te	te	te	te	ɸi	ɸi	te
b	N ^{\$}	N ^{\$}	de	de	de	dʒi	ɸi	de
m	N	de	de	de	de	dʒi	dʒi	de
s	Q	te	te	te	te	ɸi	ɸi	te
k	Q	te	te	te	te	ɸi	ɸi	te
g	N/Q	N ^{\$}	de	de	de	dʒi ^{\$}	dʒi	de
r	Q	Q	te	te	te	ɸi	te	te
t	Q	te	te	te	te	ɸi	te	te
n	de	N	de	de	de	dʒi	de	de
i ₁	te	Q	te	te	te	ɸi	te	te
i ₂	Q	Q	te	te	te	ɸi	te	te
e ₁	te	Q	te	te	te	ɸi	te	te
e ₂	Q	Q	te	te	te	ɸi	ɸi	te
i~it<行く>	te	te	te	te	te	ɸi	---	te
ki<来る>	te	te	te	te	te	ɸi	te	te
s<する>	te	te	te	te	te	ɸi	te	te

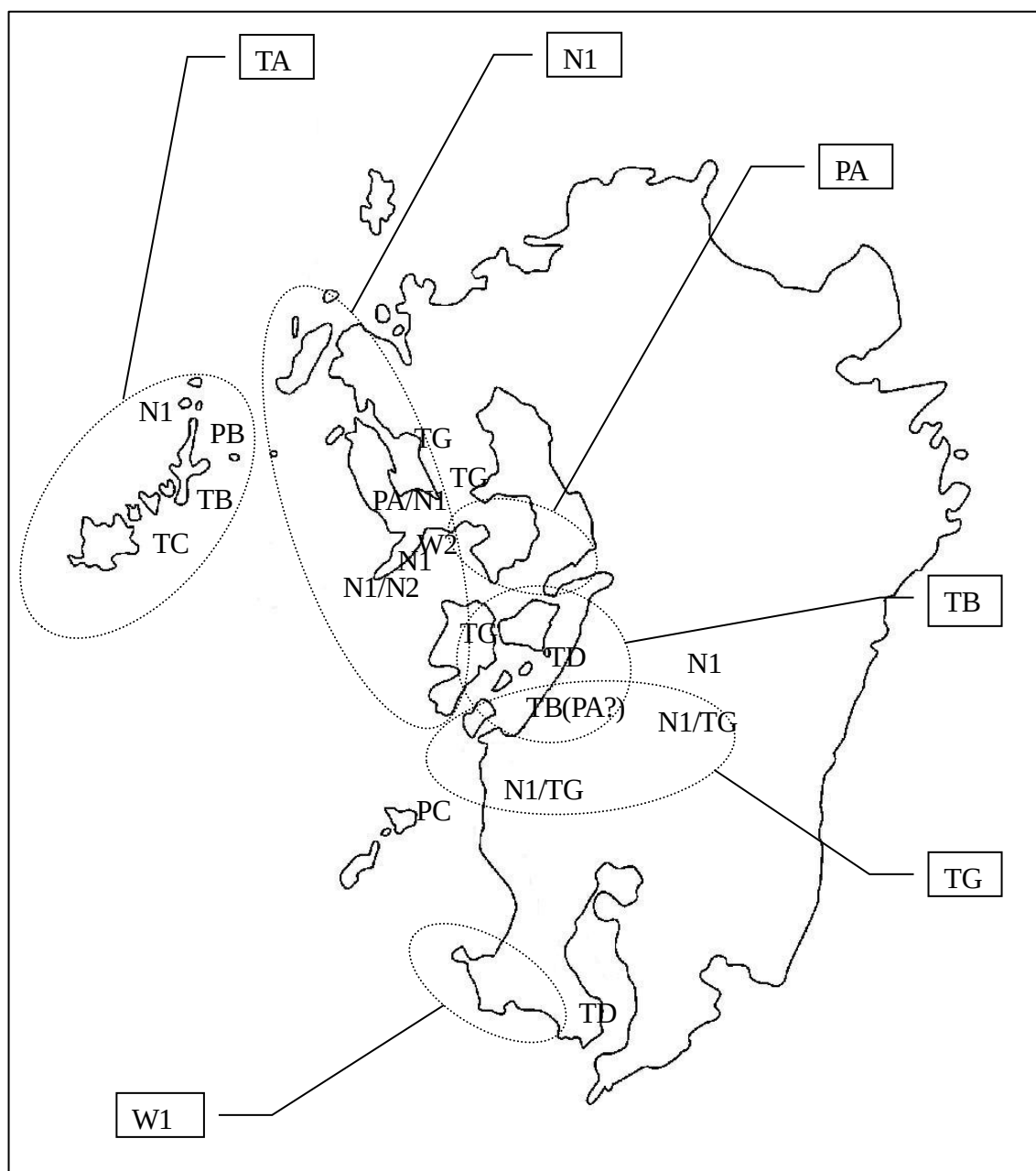
第3節の記述、及び【表 9】から分かるように、茂木方言は全体性テ形現象方言(タイプ W2 方言)、三和方言は非テ形現象方言(タイプ N1 方言)、野母崎(脇岬)方言は非テ形現象方言(タイプ N1 方言)、野母崎(野母)方言は非テ形現象方言(タイプ N2 方言)、長与町(本川内郷)方言は擬似テ形現象方言(タイプ PA 方言)、長与町(岡郷)方言は非テ形現象方言(タイプ N1 方言)である。

5. 地理的分布

本節では、現時点までに得られたテ形音韻現象の地理的問題を記述する。

テ形音韻現象の地理的分布を【図 1】に示す。これは、有元光彦(2011:35)の【図 1】に本稿の記述を反映させ、修正したものである。

【図1】では、記号 / は両方の方言タイプが観察されたこと、記号 () はその方言タイプの名残が見られることを、それぞれ表す。また、記号 ? は当該の方言タイプであるかどうか確定していないことを表す。



【図1】九州西部方言のテ形音韻現象の地理的分布

【図 1】から分かることは、当該地域は基本的には非テ形現象方言(タイプ N1 方言)に入っているということである。

長与町(本川内郷)方言は擬似テ形現象方言(タイプ PA 方言)であるが、これは当該地域の東側の島原半島を中心とする分布から繋がるものであろう。

最も特異な分布を示しているのは、茂木方言の全体性テ形現象方言(タイプ W2 方言)である。近接する地域は大部分がタイプ N 方言であるにもかかわらず、この地域に孤立して全体性テ形現象が観察されるのである。先行研究では、全体性テ形現象方言は、真性テ形現象方言が崩壊(非テ形現象化)する際の 1 つの通過段階のようなものと考えられている(cf. 有元光彦(2007a:218-222))。

一方、茂木方言に近接する地域(長崎県東彼杵郡東彼杵町・諫早市小長井町)にタイプ TG 方言が分布していることにも注意したい。また、諫早市飯盛町方言にも TG=PA という共生タイプが見られる。これらのことから、タイプ TG 方言とタイプ W 方言の間にも何らかの関係があることが窺える。有元光彦(2007b)では、タイプ TG 方言に「擬態・感染(fi)」が起こり、タイプ W1 方言が生成されるという変化を仮定している。

さらに、有元光彦(2009:27)では、次のような記述も成されている。

(5) 非テ形現象方言とタイプ TG 方言の地理的關係:

非テ形現象方言には、必ず真性テ形現象方言(タイプ TG 方言)が地理的に隣接している。

通時的変化を仮定する場合、タイプ TG 方言から直接非テ形現象方言に至るのか、それともタイプ W 方言を介するのか、現時点では明らかになっていない。タイプ W 方言の更なる発見が望まれるところである。

6. まとめ

本稿では、長崎県本土西南部方言を取り上げ、そこに現れるテ形音韻現象を記述した。

ここで最も注目すべき点は、茂木方言における全体性テ形現象の発見である。現時点では、この全体性テ形現象方言の存在は単なる偶然ではなく、タイプ TG 方言や非テ形現象方言と密接な関係があるものと考えている。そうであるとする、当該地域以外でも全体性テ形現象方言が発見される可能性が大いにあることになる。

この問題は、「非テ形現象方言とは何か」という問題にも繋がっていく。現在観察されている非テ形現象方言は、真性テ形現象方言が崩壊(非テ形現象化)したものなのか、それとも単に共通語という別物なのか、そもそもどちらかであると客観的に判

断できるのか、様々な問題を考慮する必要がある。

そのためにも、異なる方言タイプが接触すると想定される地点の更なる調査・記述が必須となるだろう。

【参照参考文献】

- 有元光彦(2005)「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005 年 9 月号 明治書院 pp.74-82.
- (2006)「長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』 第 56 巻 第 1 部 pp.47-61.
- (2007a)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房
- (2007b)『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成 16～18 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281, 研究代表者:有元光彦)研究成果報告書
- (2007c)「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」九州方言研究会・第 24 回研究発表会(2007 年 7 月 7 日)発表ハンドアウト
- (2007d)「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会・第 20 回大会発表論文集』 社会言語科学会編 pp.190-193.
- (2008a)「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』 第 57 巻 第 1 部 pp.1-13.
- (2008b)「再訪:熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(語学教育フォーラム 第 16 号) 大東文化大学語学教育研究所 pp.357-374.
- (2009)「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』 第 58 巻 第 1 部 pp.15-31.
- (2010a)「熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』 第 59 巻 第 1 部 pp.35-52.
- (2010b)『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』 平成 19～21 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(No.19652941, 研

究代表者:有元光彦)研究成果報告書

——(2011)「熊本県本土南部方言・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』第60巻 第1部 pp.25-38.

Chomsky, N. & M. Halle(1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

藤本憲信(2002)『熊本県菊池方言の文法』熊本日日新聞情報文化センター

Kenstowicz, M.(1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.

小林隆ほか(2008)『シリーズ方言学1 方言の形成』岩波書店

九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房

Mohanan, K.P.(1986) *The Theory of Lexical Phonology*, D. Reidel Publishing Company.

坂口至(1998)『長崎県のことば(日本のことばシリーズ42)』明治書院

Morphophonological Phenomenon of *Te*-form Verbs in the South-West Mainland Dialects of *Nagasaki* Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

In the dialect of the South-West Region of the Mainland in *Nagasaki* Prefecture, there are two *te*-forms in the verb conjugation system:

- (1) the form in which [te] or [de] appears, corresponding to *te* in standard dialect.
- (2) the form in which *soku-on* or *hatsu-on* appears, corresponding to *te* in standard dialect.

Furthermore, all verbs are divided into two groups, depending on the difference of the stem-final segment, as follows:

- (a) verbs which have the form (1) and (2).
- (b) verbs which have the form (1) only.

This phenomenon (called the “*Te*-form Phonological Phenomenon”) can be adequately explained by deleting not /te/, the underlying *te*-form suffix, but /e/ of /te/.

Furthermore the phenomenon I describe in this essay is related to *onbin* (sound euphony) and *ra-gyo godan-ka* (transformation into r-stem verbs) of the vowel-stem verb.

In this essay, I studied this phenomenon in the dialects of *Mogi*, *Sanwa*, *Nomozaki* region and *Nagayo-cho*.

It becomes clear that [te] or [de] appears in the *Sanwa*, *Nomozaki*, and *Oka-go* (in *Nagayo-cho*) dialects (called “Non-*Te*-form Phenomenon Dialects”). *Soku-on* or *hatsu-on* appears in the *Mogi* dialect (called the “Whole-*Te*-form Phenomenon Dialect”). [ʧ] or [dʒ] appears in the *Hongawachi-go* (in *Nagayo-cho*) dialect (called the “Pseudo-*Te*-form Phenomenon Dialect”).

The discovery of the Whole-*Te*-form Phenomenon Dialect is the key to the problem of the formation of *Te*-form Phonological Phenomenon.